

# 論文「羅生門」の構造論文集

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇氣」、三点目は「逆転」である。

一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるべきなのかという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷っているということは、考えがまとまっていけないという判断力のない子供のような下人の状態を表している。

二点目の「勇氣」について説明する。下人は生きていくために盗人になる勇氣がなかった。それは罪悪感が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きていくことと罪悪感では、罪悪感が勝つてしまい、自分のことは自分で判断し、実行できる大人にまだなりきれていない下人の幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。78頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になったことがわかる。なぜその時点なのかというと、冒頭部ではにきびを気にしていて幼い様子だったが、この場面ではにきびから手を離れたので下人が大人になったことがわかる。他には、考えているだけで実行に移せなかったが、この場面では老婆の襟髪をつかむことができたことからわかる。77頁14行目「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇氣が生まれてきた。」の部分では、勇氣が生まれてきたところは大人になろうとしていることはわかるが、実行に移していないので完全に大人になれているわけではないので「逆転」したとは言えない。そうして下人は頭の中で考えているだけで罪悪感から行動に

移せない子供から、罪悪感にとらわれないで行動できる大人へと成長したのである。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇氣」、三点目は「逆転」である。一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら飢え死にをするか盗人になっても生きるかという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷っているということは、考えがまとまっていけないというとりとめもない下人の状態を表している。

二点目の「勇氣」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇氣がなかった。それ把握に対する憎悪が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きることと悪に対する憎悪では、悪に対する憎悪が勝つてしまい、ただ悪が悪いと決めつけ、善悪の真の意味が理解できず大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。78頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になったことがわかる。なぜその時点なのかというと、今までは考えたことを実行する勇氣がなかったのに、話を聞いたあとと老婆の着物をとるという形で考えを実行したのである。そうして下人は子供へと成長したのである。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇氣」、三点目は「逆転」である。一点目の「にきび」について説明する。

下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるか飢え死にするかという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷っているということは、考えがまとまっていけないという優柔不断な下人の状態を表している。

二点目の「勇氣」について説明する。下人は飢え死にならないために盗人になる勇氣がなかった。それは善意が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。飢え死ににならないことと善意では、善意が勝つてしまい、自分の考えがよいと考えたら積極的に行動できず、大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目に「逆転」について説明する。78  
 頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になったことがわかる。なぜその時点なのかというと、下人は最初自分が生きるためにしなければいけないことがわかっていても行動できなかったが、老婆の話を聞いて行動に移したから。そうして下人は生きるために手段を選ばないと考えても肯定できない子供から、生きるために盗人になる大人へと成長したのである。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇氣」、三点目は「逆転」である。一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。冒頭部、それをいじりながら盗人になるという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷っているということは考えがまとまっていけないという不安な下人の状態を表している。

二点目の「勇氣」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇氣がなかった。それは不安が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きることと不安では、不安が勝つてしまい、生きるために何をすればいいかわからない下人の、大人にまだなりきれない幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。78

頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になったことがわかる。なぜその時点なのかというと、不安の象徴であるにきびから手を離して、不安が無くなったことを表す。そうして下人は不安や迷いのある子供から、不安のない自分で考えて行動できる大人へと成長したのである。

「羅生門」の主人公「下人」は物語の中で子供から大人へと成長した。その過程を三点説明する。一点目は「にきび」、二点目は「勇氣」、三点目は「逆転」である。一点目の「にきび」について説明する。下人のほおにはにきびがある。それをいじりながら盗人になるという迷いがあった。「にきび」は幼いことの表れである。また、迷っているということは考えがまとまっていけないというまだ子供の下人の状態を表している。

二点目の「勇氣」について説明する。下人は生きるために盗人になる勇氣がなかった。それは、下人の心の中にある善が盗人になる勇氣を邪魔していたのである。生きることと、下人の心の中にある善では、生きることと下人の正義感では、下人の正義感が勝つてしまい、悪人になる勇氣を持てず、大人にまだなりきれない下人の幼さを表している。

三点目の「逆転」について説明する。78  
 頁6行目「そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、かみ付くようにこう言った。」の部分で下人は大人になったことがわかる。なぜその時点なのかというと、老婆の襟髪をつかみ、かみ付くように言う。下人は自分の正義感を捨て、乱暴な行動をとり、悪人になった。もう一方は、ある勇氣が生まれただけで、悪人になったとは言えない。そうして下人は、ほおのにきびを気にしている子供から、心の迷いが消え、盗人になる勇氣が出て大人へと成長したのである。